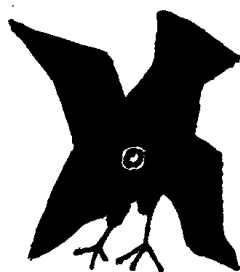


からすがカアカア 鳴いている



岩本敏男 作
東 貞美 絵



子どもの文学

からすがカアカア鳴いている

NDC 913 偕成社 162 p 23cm 1980年

発行 1980年12月 初版第1刷

著 者	いわ	もと	とし	お
	岩	本	敏	男
発行者	今	村		廣

発行所 株式会社 偕 成 社

東京都新宿区市ケ谷砂土原町3の5

電話 (03) 260-3221 (代) 〒162

振替 東京5-1352番

印 刷 新興印刷製本株式会社

製 本 文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8393-626420-0904

Printed in Japan

©岩本敏男 東 貞美 1980

瀬田貞二

お父さんのラブ・パボなし

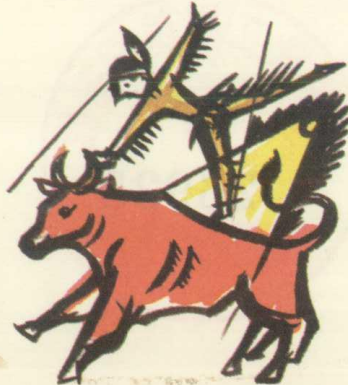
堀内誠一画

福音館書店



もくじ

- | | | | | | | |
|---------|--------|---------|--------|-------|------------|---------|
| 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 名前をかえた山 | きじの花たば | パンパのラツパ | ビーバーの谷 | ふりこ一発 | ミスタ・レッドクロス | 富士山の鳥よせ |
| 85 | 71 | 59 | 47 | 33 | 19 | 7 |





14	13	12	11	10	9	8
海賊たいじ	プアプアのくじら舟	大きい石と大きいとかげ	インドの夢うらない	バグダッドのおおどろぼう	アフリカのたいこ	指輪をもらった時計像
173	161	143	133	123	111	95



お父さんのほら話は、うちじゅうで有名です。

「お父さんの話、どうして、うそ？」

と、ようち園にかよっているもとちゃんが、きますすと、小学五年の兄ちゃんは、

「お父さん、世界じゅう、旅行したみたいだけど、ほんとは会社にしか行かないみたい。」

と言いますし、中学一年の姉ちゃんは、

「お父さんみたいに、いろんなことしてたら、百三十八才ぐらいになるはずよ。でも、四十才にしかないわ。」

と、きめつけます。

それでも、もとちゃんは、晩ごはんのあとで、きまってお父さんに、

「ねえ、また、お話しして。」



と、さいそくします。

五年の兄ちゃんも、

「ほらでもいいから、話してよ。」

と、うながします。そして中学の姉ちゃんまで、

「うんと大きいラッパ吹いてみて。」

と、けしかけます。ラッパとは、ほらのことです。

すると、お父さんは、

「なにが、ラッパなもんか、ほんとともほんと、お父さんが……。」

そこで、話がはじまります。

第一話 富士山^{ふじさん}の鳥よせ



お父^{とう}さんが小さいころ、そう、小学五年ぐらいのころは、富士^{ふじ}のすそ野^のに住^すんでいた。炭^{すみ}やきのてつだいをして、春も夏も秋も冬も、炭^{すみ}やきがまのそばにくらしていた。

わたしは、学校へ行けなかったけど、とてもすてきな勉強^{べんきやう}をした。

炭^{すみ}やき小屋^{こや}に、鳥よせの弥三郎^{やさぶろう}というおじさんがいて、このおじさんが、日本^{にほん}一の小鳥^なの鳴きまねの名人^{めいじん}だった。

なにしろ、富士^{ふじ}のすそ野^のは広いところだ。人の行かない深い森^{ふか}があつて、何万^{なんまん}となく小鳥^ながくる。弥三郎^{やさぶろう}おじさんが小鳥^なの鳴きまねをすると、みるまに、あたりの木に、数知^{かずし}れぬ鳥^ながくる。

わたしは、弥三郎^{やさぶろう}おじさんから、鳥^なの鳴きまねを教^{おそ}わった。

ちんちんからから、ほーいほい

いっぴつけいじよう、ひのようじん

ずーいきりきり、ちーちよんちよん

ひゅんひゅんけんけん、ぎよっぴるり

ごろすけぼうこう、ほうほけきよう

ちんぺぺちんぺぺ、ちちんぽい

いちぴいにいとく、さんぴいちゃん

つき、ひ、ほし、ほーい、ほい

てっぺんかけたか、つつびーびー

こんなぐあいで、いろいろな鳴き方が五十三とおりもあつたのさ。

弥三郎おじさんは、それをすっかり、教えてくれた。そして、言うには、

「いいか、ようくきけよ。小鳥をよぶには、鳥の氣持にならなきゃいかん。それからもひとつ、小鳥をよんだら、いっしょに遊ぶ。けっして、そいつらを、つかまえちゃ、いけないぞ。」

こうして、わたしは、五十三とおりの鳴きまねを、ようくおぼえたばかりか、鳥の育て方から、やしない方、てあてのし方、それに小鳥の巣づくり、餌あさり、寝

方、飛び方、とまり方、なんでもかんでも、おぼえたのさ。

それで、わたしと弥三郎おじさんは、仕事のあいまに、広いすそ野で、小鳥をよびよせては、遊んだものさ。

ふたりがよぶと、

すずめ、うぐいす、やまがらす

めじろ、ほおじろ、しじゅうから

やまがら、こがら、きじ、ひたき

きじぼと、おおるり、くろつぐみ

つばめ、かつこう、ほととぎす

つつどり、じゅういち、あおばずく

たか、わし、はやぶさ、とび、ふくろう

というぐあい、みるまに、あたりの木に、数知れぬ鳥が集まってきて、まるで





いちめん、百千の鳥の花がさいたように
みえたものさ。

さて、ある年の春、朝のうちに、わたしは、ひとりで小山の上に立って、いつものように鳥よせをやろうとした。東の空から、まっかな大きなお日様^{ひさま}がのぼって、みるみるちち色のもやが上がつていく。空は、うすむらさき色になって、わたしのからだも、まい上がる鳥のようにさわやかになった。そのとき、ひょいと、五十四番^{ぼん}めの鳥の歌^{うた}が、うかんできた。そして、口がひとりで動いて、胸^{むね}いっぱい、空にひびくと、歌^{うた}がなりだした。



ビルラ、ビルラ、ホルピテ、ギーン

ああ、その歌の、すみきって、大空
にひろがることといったら……。

われをわすれて、わたしがこう歌っ
ていると、もも色にかがやく富士山の
雪のかんむりの上に、ぴかりと光る点
がみえた。おやと思うまに、それがぐ
んぐんはやくまいおりて、もうすぐそ
ばに、わしより大きな鳥の形になつて、
つばさをひろげて近づいてくる。わた
しの近くの松の枝に、大きな鳥は、び
たりととまった。それまでいろいろな
鳥をみたが、こんな鳥は、はじめてだ。

頭に銀ぎんのときかをつけて、からだの色はにじの七色。おなが鳥のように長いしっぽは、松まつの枝えだからゆらりとたれているが、目のさめるような金色きんいろで、さわれば切れそうなほど、光っている。なんの鳥だかわからないけれども、わたしの歌うたにひかれて飛とんできたのは、まちがいない。

わたしは、その鳥をつれて、炭すすやき小屋こやに帰かえってきた。わたしの行くあとについて、鳥は、おおとりあゆみという歩き方で、ゆうゆうと足をはこびながら、長いしっぽを、しゃらんしゃらんと鳴ならし鳴ならし、ちゃんと小屋こやへはいつてきたんだよ。すると小屋こやの中が、ぱっと明るくなって、さすがの弥三郎やさぶろおじさんが、おじぎをし



